

前置詞 *en* の多義性と統一的解釈

本間 幸代

(パリ第10大学博士課程修了)

フランス語の前置詞 *en* の多義性を統一的に捉えようとした研究のうちで特に興味深いものとして、**Franckel & Lebaud (1991)**、**Leeman(1995)**そして **Oguma(2000)**の研究が挙げられる。しかしよく解明されていない用法もまだ残されている。例えば、*en (été / automne / hiver)*という用法であるが、これは *au printemps* との比較により単に属詞が母音で始まるか否かという発音上の問題としてしばしば処理される。しかし、*automne* に関しては *à l'automne* と *en automne* の2つの形が可能であること、そして *été* についても、*à l'été 2007* のように *à* と共起することができることなどからも、この用法を発音上の問題として扱うのは疑問が残る。次に *en France* などの用法のように国名が属詞となっている用法であるが、これは *à (au Japon)* と競合関係に入り、国名の文法上の性によって前置詞の選択が制約されるという非常に珍しい例であることからやはり一般的に例外的用法として扱われている。本発表では、これらのようにあまり注目を浴びることのなかった用法に焦点を当て、「自己完結性」という概念に着目しつつ、*en* の他の多くの用法との統一的説明が可能であることを示す。